

5 子宮頸部腺癌株(CAC-1)における
CA 125産生の検討—各種薬剤添加による産生,発
現,分泌の検索

札幌医大

林 卓宏,早川 修,山内 修,山本裕之,竹原正輝,
福中規功,工藤隆一

(目的) CA 125は,婦人科悪性腫瘍の診断・治療に頻用されているが,その産生機構は解明されていない. CA 125値を増幅あるいは減少させる薬剤が存在するならば,その薬剤の投与により疾患の早期発見が可能と考えられる. 今回我々は, CA 125産生能を有する子宮頸部腺癌株CAC-1を用い,各種薬剤を添加しCA 125抗原の産生・分泌について検討したので報告する. (方法) 薬剤添加実験は,対数増殖期に入る4日目より開始した. 使用した薬剤はdbc-AMP・theophyllin・glucocorticoid・sodium butyrate (NaBT)・retinoic acid (RA)・M-CSF・trichostatin A (TSA)の7種類で,添加開始より6,12,24,48,72時間各々における細胞および培養液の回収,細胞数の算定を実施した. CA 125抗原の測定は,RIAキットを用いた. CA 125の発現は,flowcytometryを用いて検索した. (成績) NaBTにおいて,controlと比較しCA 125分泌は時間依存性に約2倍に増加した. TSA100ng/mlにおいては,controlと比較しCA 125分泌が最高約1.5倍の増加を認めしたが,CA 125の発現は細胞周期による明らかな差を認めなかった. glucocorticoidを含む他の試薬においては,controlと比較しCA 125分泌において有意差は認められなかった. (結論) CA 125の分泌増加を示したNaBT・TSAは,どちらもヒストン蛋白のdeacetylation阻害をもたらす物質である. 特にTSAは,その作用により,低濃度で可逆的に細胞をG1,G2期に集積させることが知られている. 従って,今回の結果はCAC-1株においてCA 125の分泌が,細胞周期に依存している可能性を示唆するものと考えられた.

6 CIN病変の長期follow up成績からみ
た子宮頸部癌化とヒトパピローマウイルス(HPV)

兵庫県立成人病センター, 鐘紡記念病院*

東田太郎, 長谷川和男, 西村隆一郎, 川口真衣子,
山崎正明, 北川 勝, 大津文子, 武内久仁生,
松浦役児*

[目的]CIN病変の癌化への過程におけるヒトパピローマウイルス(HPV)の関与を探る目的で,これら症例の長期follow upを行い,HPV感染との関連性を検討した. [方法] CIN病変におけるHPV-DNAの検出及び型分類にはHPV58型を(一部症例では16型も)プローブとしたサザンブロット法を用いた. また制限酵素はPST-1, BAN-1を使用した. [成績]過去にCINが認められ治療を行わずに12ヶ月以上追跡したregress例におけるHPV-DNAの陽性率は20%(19/95)で,その型別頻度は52,58型各3例,56型2例,33,39,51型各1例で他はすべて型不明であった. persistent例では60%(15/25)認められ,58型が最も高率で,ついで33,52,16型が多く認められた. progress例では50%(4/8)の陽性率で,それぞれ58,16,52,56型が認められた. さらにHPV-DNA検査後12ヶ月以上にわたって追跡したCIN病変の内,HPV-DNA陽性例では39%(12/31)にCIN病変の存続が認められたが,HPV-DNA陰性例での病変存続は9.3%(5/54)であった. これらの内で,HPV-DNAを再検索しえた16例中8例では同型のHPV感染が持続し,progress例が2例(58,16型),persistent例が3例(58,52型,型不明),regress例が3例(39,56型,型不明)認められ,残りの8例は陽性からすべて陰性化し,病変もregressした. [結論]HPV感染はCIN病変の持続に深く関わっており,癌化には特定の型が関与しているものと推察される. しかしHPV感染例でも病変が自然消退する場合があることから,癌化にはHPV以外の因子の介在も示唆された.